

息長古墳群の変遷と特質

森 下 章 司

は じ め に

今回の定納古墳群の調査により、息長古墳群の変遷をたどる上で重要な時期の資料を得ることができた。弥生時代から古墳時代後期に至るまで、いわゆる「首長墓」の変遷をひとつの小地域でみることができるという点で、息長古墳群はモデルケースになりうるものと考ええる。これまでの調査・検討結果をふまえて、その変遷と地域的特色、他地域との関係についてまとめる。

1 息長古墳群の変遷

息長古墳群の変遷に関しては高橋克壽による的確な論述があるが(高橋1995)、ここではその後に判明した知見や弥生時代の墳丘墓もふくめて新たな取りまとめをおこなう。

天野川流域の平野部では多数の方形周溝墓群が調査されている。とくに中心となるのは法勝寺遺跡であり、弥生時代中期中葉から後期まで、同一場所に重なって墳墓が築かれている点が大きな特色である(宮崎1990)。この遺跡は弥生時代～古墳時代にかけて墓域として継続するが、これに対応する集落遺跡として北方の長沢遺跡が想定されている。

墳墓の大多数は方形周溝墓である。中期中葉にはほぼ同一規模で一辺10m程度のやや小型のものが密集して築かれているが、中期後葉には一辺10～15mと大きさにやや格差が生ずる。さらに後期後葉には規模に明確な差が認められ、群の中心には大型の方形周溝墓が位置する。さらにその中には前方後方形の形態をもつものも登場する。

法勝寺遺跡のS D X 323号墓は全長20.4m、後方部幅12.3m、前方部幅6mをはかる前方後方形の墳墓である。墳丘上部は後世の削平により残されていない。同一方向に軸をもつ方形周溝墓が周囲に築かれている。宮崎幹也による北近江土器編年の法勝寺F－1段階(纏向Ⅰ式 廻間Ⅰ－0様式平行)に位置づけられる(宮崎1994)。

法勝寺遺跡の墳墓は弥生時代末まで継続するが、その後に特徴的な墳墓が認められるのは天野川の南側の西円寺遺跡である(宮崎1993)。

西円寺遺跡は、天野川に平行する方向に開削された大溝をとまなう集落であり、墳墓は集落内ないし近接した位置に築かれている。もっとも特徴的な墳墓である西円寺第1号墓は、陸橋部をもつ円形周溝墓で、長軸22mある。出土土器は宮崎編年の顔戸G－3段階(纏向Ⅲ式新相 廻間Ⅱ－4様式)に位置づけられる(宮崎1993 60頁)。

これら法勝寺S D X 323号墓と西円寺第1号墓の時期については、他地域の墳墓との平行関係や「弥生時代」「古墳時代」の時期区分問題と関連して、今後さらに検討が必要であろう。たとえば『前方後円墳集成』近畿編では、西円寺第1号墓が古墳時代1期に位置づけられている。(用田・細川1992)。

いずれにしても、この地域では弥生時代末～古墳時代はじめに、規模や形態において墳墓間の格差が顕著になってくる。法勝寺遺跡S D X 323号墓と西円寺第1号墓は平地に築かれている点、集落内ないし集落に近接した位置にある点が共通する。

法勝寺S D X 323号墓の場合は、小型の墳墓と同じ墓域につくられている点も特徴である。格差はありながら、立地において集落や一般的な墳墓から分離していない段階ととらえることができる。

西円寺第1号墓に続く時期、宮崎編年で顔戸H－1・H－2段階(纏向Ⅳ式 廻間Ⅲ－1・2様式)に該

当する墳墓は明確でない。ただし次の定納古墳群および平地の集落遺跡の調査状況から、この段階前後に丘陵上に墳墓が築かれるようになったと考える。そして可能性として日撫山の墳墓があげられる。

定納古墳群は、本報告で示したとおり、丘陵上に継続的に築かれた墳墓群であり、時期は古墳時代前期後半～中期前半に位置づけられる。集落からは分離し、高地に築かれたものであるが、一方で集落遺跡からの眺望が可能で、墳丘の高まりがよくめだつ場所が選ばれている。1号墳にみられた、墳丘周囲に平坦面をめぐるような造作は、平地部から見あげたときに墳丘の高まりをきわだたせる役割を果たす。1号墳と5号墳では、地山を成形した後に盛土を高く積み上げており、造営にかかる労力は平地の墳墓を上回る。また長大な刳拔式木棺と朱・ベンガラを多く用いている点も特徴である。定納古墳群前段階の墳墓の状況がよくわからないが、集落から独立して丘陵上にいわゆる首長墓が築かれるようになるのは、造営体制や墳墓の性格において画期ととらえられる。

定納古墳群に続いて築かれたと推定されるのは甲塚1号墳である。直径43mに復元され、大型の円墳である（高橋1995）。北側に付属する小さな方形の高まりを、今のところは2号墳として区別しているが、造出の可能性はある。発掘調査はなされていないので詳しい特徴は明らかでないが、表面には石が多数露出しており、全面に葺石がなされているのは確実である。墳頂部には広い平坦面があり、竪穴系の埋葬施設が複数存在することを想定できる。

甲塚1号墳は定納古墳群よりもさらに50mあまり高いところに位置し、墳丘の高さも6mあって、その偉容を示す。葺石はその外観をさらにきわだたせる効果を発揮する。息長古墳群の中で、平地からの眺望という点でもっともめだつのは甲塚1号墳である。

甲塚1号墳と同様に中期に位置づけられる円墳として、奥深古墳群が同様に丘陵上に位置する。奥深古墳群は2002年に近江町教育委員会によって調査された。埋葬施設は盗掘によって破壊されており、須恵器片が出土したのみである。後別当古墳も丘陵上に位置する円墳と位置づけられているが、その内容はまったくわかっていない。

中期末における塚の越古墳の築造は、息長古墳群の変遷の中でも大きな画期と位置づけられる。

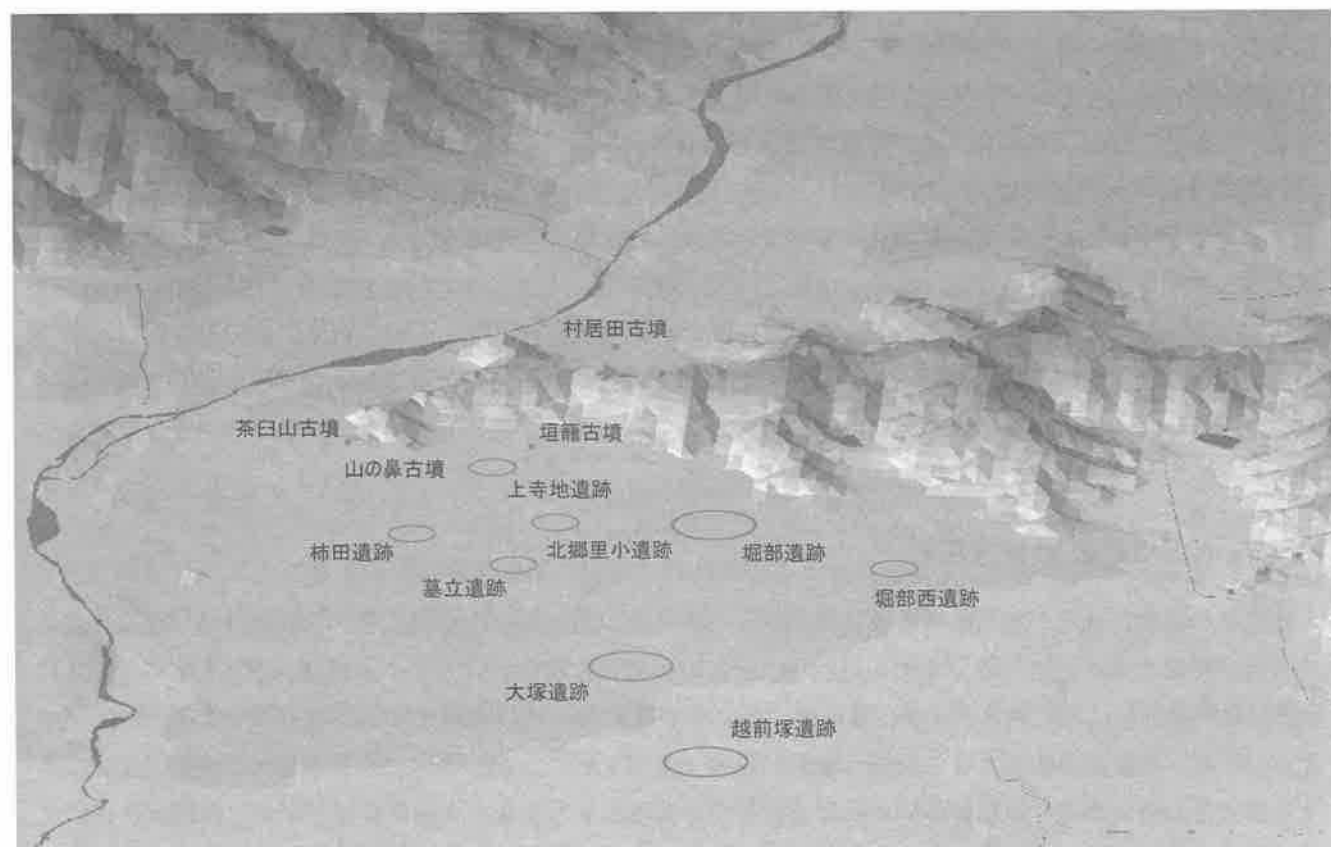
この古墳の存在は古くから知られており、塚の越古墳出土の伝承をもつ仿製鏡や、鋳留金具の出土などが報告されている（島田1925）。1989（平成元）年の調査で、全長40.4mの前方後円墳に復元された。周濠・葺石をそなえ、石見型盾形埴輪と円筒埴輪をめぐらし、木製樹物が存在していた可能性も考えられた（宮崎1991b）。典型的な石見型盾形埴輪の分布域の東限にあたる。埋葬施設は横穴式石室と推定され、この地域でもっとも古い例に属する。墳丘形態、埴輪、埋葬施設、副葬品のいずれをとっても、格段に優れた内容をもつ古墳と位置づけることができる。「湖北地方における息長古墳群の優勢を決定づけたのは、山津照神社古墳よりもむしろ、先行する塚の越古墳の出現であった」と評されている（高橋1995 116頁）。石見型盾形埴輪や円筒埴輪の技法的な特徴が示すように、明らかに畿内から導入された形式の埴輪が用いられるようになった点も注目される。

狐塚遺跡からは弥生時代の方形周溝墓とともに古墳時代中期末～後期の円墳がみつまっている。そのうちの5号墳は全長30mの造出付円墳で、豊富な形象埴輪が出土したことで知られている。塚の越古墳と狐塚5号墳の年代的関係については、埴輪の評価をめぐって意見が分かれている。宮崎幹也は円筒埴輪の特徴から塚の越古墳→狐塚古墳群の順序を考え（宮崎1991b）、高橋は「豊富な埴輪の構成や、刷毛目の起点をそろえた円筒埴輪」から狐塚5号墳が併行ないし先行する可能性を説く（高橋1995）。

細かい時間的な関係はともかくとして、両者は別のまとまりをもつ古墳ととらえたい。狐塚古墳の周囲では、埋塚古墳など中期末～後期の小規模な古墳群が調査されている。また西円寺遺跡でもB種ヨコハケを施した窖窯焼成の埴輪をもつ、西円寺第3号墳が存在する。それらは弥生時代に墳墓域として利用されていた



息長古墳群と集落遺跡



長浜古墳群と集落遺跡

図50 息長古墳群・長浜古墳群と集落遺跡

地に築かれていること、小規模で群をなしていることなどに共通点をもつ。一方、塚の越古墳は単独墳の様相が強い。

両者とも平地に築かれた古墳であり、周濠をそなえている点も注目される。正確に言えば、塚の越古墳は定納古墳群の丘陵から続いてくる尾根状の微高地上にあり、狐塚古墳群は顔戸山周辺の微高地上に位置する。しかしそれまでとは明らかに異なる立地、より集落に近い平地に再び墳墓が築かれるようになったのである。

こうした立地の変化は、ひとつに古墳の外観や祭祀のあり方とも関連する。丘陵上にあって見上げるのではなく、より間近で接するような存在に墳墓の位置が変化したものといえる。この段階に埴輪が多く古墳に普及するのも同様の現象ととらえられよう。また交通路との関係も重要であろう。東山道の位置が古墳時代においても重要な交通路であったとすれば、道からの距離を意識した立地と考える。

後期前半の山津照神社古墳は、息長古墳群中でもっともよく知られた存在である。1994（平成6）年の京都大学文学部考古学研究室の発掘調査により、墳長46mあまりの前方後円墳に復元された（小野山ほか1995）。円筒埴輪がめぐらされ、石見型盾形埴輪も配されていること、くびれ部で須恵器を用いた祭祀がおこなわれていたことが判明した。1882（明治15）年、神社の参道工事の際に開口した埋葬施設は埋め戻されて今みることはできないが、残された絵図から比較的小ぶりの石を積み上げた横穴式石室で、玄室奥に石棺ないし石屋形状の施設のあったことがわかる。一部取り出された副葬品として、金銅製の冠ないし杵や鉄地金銅張馬具、刀剣、刀子、水晶製三輪玉や多数の須恵器などが保存されている。築造時期や場所から継体大王や息長氏との関連でとりあげられることが多い。いずれの要素をとりあげても、息長古墳群中において、また近江の後期古墳においてもきわだった存在の古墳である。また埴輪など畿内との関連を強く示す特徴が多い点も注目される。

山津照神社古墳は、息長古墳群のなかでももっとも奥まった位置にある。琵琶湖よりの平地部からの眺望は望めない。おそらくその立地は、交通路や集落との位置関係によるものと理解される。

従来息長古墳群の最後の前方後円墳と位置づけられてきたのは、顔戸山の北西裾に位置する人塚山古墳である。しかし、2001（平成13）年、近江町教育委員会と大手前大学史学研究所の共同調査により、この墳丘状の高まり全体が岩盤で構成され、その上を近世後半の廃棄物を含む層が直接覆っていることが判明した。須恵器片がわずかに出土している点には留意すべきであるが、盛土層などはまったく存在せず、後期の前方後円墳の存在を示す材料はない（森下・藤本2002）。この調査により、山津照神社古墳を息長古墳群の最後の前方後円墳とみることができるようになった。

以上のように弥生時代の墳墓から続く息長古墳群の変遷は、ひとつの流れとして追うことができるばかりでなく、立地や古墳の規模・内容にさまざまな変化が認められる。この状況を周囲の古墳群と比較して検討する。

2 長浜古墳群と息長古墳群

北近江の古墳は分布が密にまとまる地域がいくつかある。はやくに田中勝弘は、古保利古墳群をはじめとする高月町域、長浜古墳群の分布する長浜市、近江町の息長古墳群という3つの地域的なまとまりを示している（田中1982）。これに加え、近年、彦根市において全長100mを超える大型の前方後円墳の存在が知られるようになり、発掘調査もおこなわれた（滋賀県埋蔵文化財センター2005）。周辺にこの前後の時期の古墳が存在するかどうかはわかっていないが、ここにも核となる古墳のまとまりを想定できる。

息長古墳群との関連で重要なのは、長浜古墳群（横山北部古墳群）である。長浜市の北東部、姉川流域に接した位置にあたる。定納古墳群が横山丘陵の北端にあたるのに対し、長浜古墳群はその北端にある。

長浜古墳群のなかでは茶臼山古墳の規模がもっとも大きい。低い丘陵の尾根の突端部に築かれた前方後円

墳である。墳長約100mに復元され、葺石をそなえ、段築の存在も想定される。時期比定をめぐる諸説がある。以前にこの古墳の時期を中期後半にさげる材料とされてきた埴輪や須恵器は、近隣の垣籠^{かいごめ}古墳からの出土品と考えられるようであり、明確な時期の指標がとぼしい。近年においても、墳形や埋葬施設の地中レーダー探査の結果などから前期後半に位置づける見解（宮森・森口1996 219-221頁）や、中期にくだる可能性を示す見解（辻川2003d）があって決着はついていない。

茶臼山古墳が前期になるかどうかは別にしても、前期にはいわゆる首長墓が継続して築かれたとみられる。丘陵の頂部に築かれ、前方後方墳の可能性をもつ龍ヶ鼻古墳、丘陵尾根の突端部に築かれた前方後円墳の山の鼻古墳が、前期に属するものと考えられている。丘陵上には大小の円墳と方墳が並ぶ。中期前半の古墳は明瞭でないものの、中期末には丘陵下の平野部に垣籠古墳が築かれる。周濠をもつ前方後円墳であり、埴輪も出土している。垣籠古墳の埴輪に関しては近年重要な新知見が判明しており、後で詳しく触れることにする。

またこれらの古墳群からやや離れた位置ではあるが、やはり横山丘陵沿いの平野部に位置する中期後半の前方後円墳として村居田古墳の存在も見逃せない。規模など不明な点も多いが、石棺を埋葬施設として、埴輪も出土している。

こうした比較的規模が大きく、副葬品も多く出土している古墳とは別に、墳丘上部が削平されて埋葬施設や副葬品ははっきりしないが、息長古墳群の狐塚古墳群のように平地部に小規模墳が群集して築かれているものとして、上寺地遺跡（稲葉・松室1996）、柿田遺跡（仲川1989）などで古墳群が中期後半に展開する。なお長浜古墳群から離れた平地にある越前塚遺跡でも弥生時代中期～後期の方形周溝墓群の上に、古墳時代中期後半の周濠をもつ方墳が築かれている。また別に越前塚古墳は後期後半に位置づけられ、前方後円墳の可能性もあるという（宮成（編）1988）。

両古墳群の歩みを比較すると、前期においては長浜古墳群が優勢で、はやくから埴輪も導入されている。茶臼山古墳の位置づけによって評価は大きく分かれるが、前期に遡るとすれば息長古墳群に対する優位性はさらに高まる。中期前半とすれば、甲塚1号墳との細かい年代的関係が問題となる。

中期後半になると両者はよく似た変化を示す。丘陵裾の平地に周濠をもった前方後円墳を築き、埴輪を配する。比較的小規模で埴輪をもつ古墳群も形成される。また早くから横穴式石室を導入していた可能性が高い。

辻川哲朗は垣籠古墳が塚の越古墳に先行するとし、後期の段階で、長浜古墳群から息長古墳群へ中心が移ったものと想定されている（辻川2003c）。時期関係は微妙であるが、息長古墳群と長浜古墳群とでは、中心となる時期に違いが認められる。

3 墳墓と集落

先にも触れたように息長古墳群の変遷は、集落との関連をある程度比較しながら検討することができる。また長浜古墳群の周辺でも集落遺跡の調査が進んでいる。これらの成果を利用して、墳墓と集落との関係をまとめてみよう。

弥生時代においては双方とも、後期の集落遺跡が各地でみつまっている。同時期の墳墓は、集落の付近に群として営まれている。法勝寺遺跡にみられたように、前方後方形や陸橋付の円形墓など形や規模において格差のある墳墓が後期には登場してくるが、やはり他の小規模な墳墓と同じ墓域につくられる。

調査された弥生時代後期から古墳時代にかけての集落遺跡は、中心となる時期にやや差があるようだ。近江町域では顔戸遺跡・高溝遺跡を経て、古墳時代前期はじめには黒田遺跡が中心的な位置を占める。宮崎幹也は、定納古墳群に対応する時期の集落遺跡として、米原市の入江内湖遺跡に注目する。図51には定納古墳

群の可視領域について、もっとも高所に築かれた5号墳で代表させて示した。すぐ西側の顔戸山にはばまれ、法勝寺遺跡など顔戸遺跡群からの眺望はのぞめない。黒田遺跡からも無理ではないが、やや離れた入江内湖遺跡群からの眺望が可能である。

長浜古墳群近傍では、北郷里小遺跡、上寺地遺跡、柿田遺跡などの集落遺跡の調査がおこなわれている（稲葉・松室1996 仲川1989）。それらは後期に成立したものが多いが、「横山丘陵に茶臼山古墳などの前方後円墳の造営がはじまる古墳時代前期後半から中期前半になると北郷里小遺跡は一時衰退し、上寺地遺跡もやや縮小傾向となる」が、「この時期の遺構が多く検出されているのは柿田遺跡で、この地の拠点的な集落として古墳の造営に関ったもの」と推定されている（稲葉・松室1996 48頁）。それらの集落からやや琵琶湖よりに位置するものの、弥生時代後期の大集落と考えられる大塚遺跡も注目される（丸山1995）。隣接して多数の弥生時代中後期の方形周溝墓群が見つかった越前塚遺跡がある（宮成（編）1988）。越前塚遺跡からは、口縁部に突帯をめぐらし、B種ヨコハケの施された円筒埴輪が出土している。近江町の狐塚遺跡と同様に、埴輪をもつ小規模な古墳が群集している状況が想定される。

両古墳群の変遷の上で画期と先に位置づけた時期、中期後半における集落の様相は明らかでない。長浜では柿田遺跡が中心的な位置を占めるようだ（仲川1989）。息長古墳群の中後期に対応する集落遺跡はわからない。今のところ法勝寺、狐塚、黒田の諸遺跡の調査結果でも、その時期の遺構・遺物が希薄であることからすれば、調査のおこなわれていない、塚の越古墳周辺に移動していた可能性がある。

いずれにしても、両地域ともに古墳に大きな変化がみられた時期に、集落の中心が移動したものと考えられる。

4 墳墓の諸要素と地域間関係

小地域間内における墳墓や集落の変遷をみてきたが、ここでは墳墓を構成する諸要素に着目し広く他地域の古墳との比較を進める。

立地と墳形 先にも触れたように、息長古墳群も長浜古墳群もともに前期～中期前半は主として丘陵上に古墳が築かれる。その中で定納1号墳は前方後方墳という墳形が注目される。赤塚次郎は前方後方墳の平面形態を分類して地域によって特徴があることを見出しているが、定納1号墳のように後方部が長軸に長い形式は正方形のものから変化してきたものと位置づけている（赤塚1992）。この地域では法勝寺遺跡においてはやくに前方後方形の墳墓が登場している。前方後方形と円形の墳墓が交錯した流れをみることができる。どちらについても、時期により他地域からの影響に変化が生じたものとみる。長浜古墳群中にも龍ヶ鼻古墳などの前方後方墳が存在し、さらに北方の古保利古墳群でも前方後方墳が卓越する。

一方、中期前半と推定される大型円墳の甲塚1号墳は、他の丘陵上の古墳と比較してもきわめて高い位置に築かれている点が特色である。同様に大型円墳が高所に築かれた例は、岡山県月の輪古墳（近藤（編）1960）、兵庫県茶すり山古墳（岸本ほか2003）、京都府私市円山古墳（鍋田ほか1989）など各地に認められる。中期前半においては低地においても大型円墳が各地で築かれ、前方後円墳に匹敵するような量の武具・武器類を副葬している例がめだつ。甲塚1号墳の副葬品や埋葬施設についてはわからないが、以上のような立地の共通性などからみて、広く共通の性格をもった被葬者の古墳としてとらえられる。

埴輪 円筒埴輪の様相は、他地域との関係を検討する上で重要な材料を提供する。まず長浜古墳群の埴輪を詳細に検討した辻川哲朗の最近の研究成果に依拠して記述を進める（辻川2003d）。

先にも触れたようにこの地域における埴輪の導入は長浜古墳群が先行する。また中期後半においても、畿内地方の埴輪と共通性の高い埴輪が使用されている。

ところが垣籠古墳においては尾張型埴輪が用いられていることが明らかにされた（辻川2003a・2003c・2003

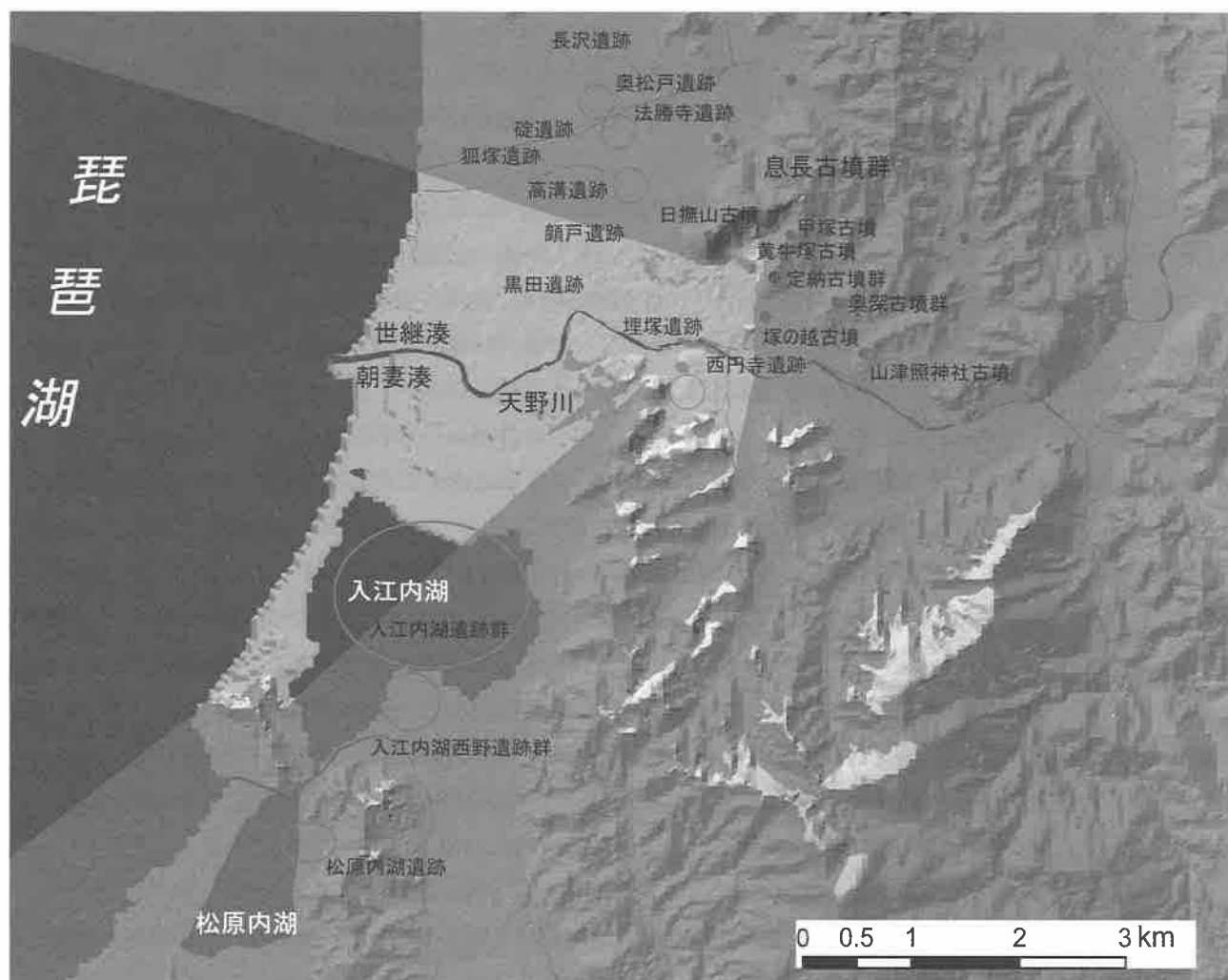


図51 定納古墳群の可視領域

d)。尾張型埴輪とは、川西宏幸が最初にそのまとまりを指摘し、赤塚次郎がその技法的特徴を明らかにして命名した特徴的な埴輪群である(川西1978 赤塚1991)。尾張～美濃に分布がまとまり、きわめて地方色が強い。それまでは畿内地方に近い埴輪の様相が続くことからみるなら、この地域への導入の意義は大きい。一方、直後の時期に息長古墳群には畿内の特徴をもった埴輪が普及するのであり、対照的である。

狐塚5号墳、塚の越古墳、山津照神社古墳に用いられた円筒埴輪は、鐘方正樹のいうV群系の埴輪であり、あらたに編成された埴輪製作者集団によるものと評価されている(鐘方1999)。石見型盾形埴輪はV群系埴輪にともなうものであるが、息長古墳群のそれは分布の中心の東限にあることを強調しておきたい。

なお山津照神社古墳の円筒埴輪が、兵庫県西宮山古墳のものときわめてよく似た特徴をもつことが注目されている(高橋1995)。2003年に京都国立博物館および龍野市教育委員会所蔵の西宮山古墳出土円筒埴輪と山津照神社古墳出土の円筒埴輪とを直接比較する機会を得た。ハケ目パターンの一致など確実な証拠は得ていないが、技法の細かな特徴が共通しており、両者が同一製作者集団の製品である可能性は十分ある。

埋葬施設 定納古墳群にみられた長大な刳拔式木棺は各地にみられるものであり、特定の地域とのむすびつきを示す材料とはならない。先にみたように5号墳西棺にみられた端部を粘土塊で塞ぐ手法も、各地に散発的にみられる。長浜古墳群では前期～中期前半では埋葬施設の調査例がないので比較はできない。

形態や構造はわからないが、塚の越古墳にははやくに横穴式石室が導入され、垣籠古墳も横穴式石室であった可能性が考えられている(辻川2003c)。埴輪と同様、畿内から直接に影響を受けたものと考えられる。な

お山津照神社古墳の横穴式石室の奥に描かれた石組みが「石屋形」であったとすれば、九州系の埋葬施設の影響を考える必要が生ずる。

5 息長古墳群の特質

息長古墳群の変遷にもっとも影響を与えた要因は、その地理的位置にある。本書でも各所で言及し、さらに藤本論考で中世の交通路のあり方からも論じられているように、近畿、北陸、東海を陸路と湖上交通とをつなぐ結節点にあたる。黒田遺跡では祭祀土壌 S X01 から多数の土器が出土したが、そこには畿内や東海系の土器や、北陸、讃岐のものに類似した土器がみられた。古墳時代前期初頭における地域間交流の交点としてのこの地域の特色を如実に物語る資料である。

墳墓の諸要素のさまざまな変化は、それぞれに特色をもつ他地域からの影響を受けやすい立地に要因を求めることができよう。息長古墳群は全体としては近畿地方の影響と考えられる要素が多いが、定納 1 号墳の墳形とその造作など東海地方の影響を考える余地がある。

長浜古墳群とでは立地や横穴式石室の導入など共通の変化を示す要素もあるが、前期段階での埴輪の導入（長浜古墳群）、大型円墳の築造（息長古墳群）、尾張型埴輪の導入（長浜）、中期末～後期において近畿地方の古墳の強い影響（息長）といった点で違いもある。

集落の様相とも比較すると、息長古墳群と長浜古墳群とは関係をもちつつも別個に展開した集団による造墓活動を示す。他地域との影響関係の変化などにより、それぞれの活動には起伏が生じたようだ。古墳時代における小地域の状況を通時的にみることができる点で、本地域は興味深い事例を提供している。

参考文献

- 赤塚次郎 1991 「尾張型埴輪について」『池下古墳』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第24集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 34-50頁
- 赤塚次郎 1992 「東海系のトレースー3・4世紀の伊勢湾沿岸地域」『古代文化』第44巻第6号 古代学協会 35-49頁
- 安土城考古博物館 2003 『日継知らず可き王無しー継体大王の出現ー』平成15年度春季特別展図録 滋賀県立安土城考古博物館
- 稲葉隆宜・松室孝樹 1996 『北郷里小遺跡 上寺地遺跡 中町田遺跡』県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書 XⅡ-1 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
- 稲葉隆宜 1997 『上寺地遺跡 北郷里小遺跡 法性寺遺跡 墓立遺跡』ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書 XXIV-1 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
- 稲葉隆宜・内田保之 1999 『上寺地遺跡 北郷里小遺跡』ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書26-3 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
- 岩井薨堂 1909 「近江國北郷里村字垣籠古墳に就きて」『考古界』第7篇第11號 考古學會 457-474頁
- 植田文雄(編) 2004 『神郷亀塚古墳』能登川町埋蔵文化財調査報告書第55集 能登川町教育委員会・能登川町埋蔵文化財センター
- 植野浩三・信里芳紀(編) 1997 『五村遺跡ーいきがいセンター建設に伴う発掘調査報告書』虎姫町文化財調査報告書第2集 虎姫町教育委員会
- 小野山節・高橋克壽・森下章司・吉井秀夫 1995 『琵琶湖周辺の6世紀を探る』平成6年度科学研究費補助金一般研究B調査研究成果報告書 京都大学文学部考古学研究室
- 鐘方正樹 1999 「2条突帯の円筒埴輪」『埴輪論叢』第1号 埴輪検討会 109-131頁
- 河内一浩 2003 「古墳時代後期における円筒形埴輪の研究動向と編年」『埴輪論叢』第4号 埴輪検討会 39-59頁

- 川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会 95－164頁
- 岸本一宏・岩本崇・加藤一郎・千葉太朗 2003 『茶すり山古墳調査概報』兵庫県教育委員会 学生社
- 岸本道昭 1996 「新宮東山古墳群の研究」『新宮東山古墳群－土採りに伴う緊急発掘調査報告書－』龍野市文化財調査報告16 龍野市教育委員会 55－84頁
- 北原治・中川治美 2002 『入江内湖西野遺跡』県道彦根米原線緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査報告書 滋賀県教育委員会事務局文化財保護課・財団法人滋賀県文化財保護協会
- 黒坂秀樹(編) 2001 『古保利古墳群第1次確認調査報告書』高月町教育委員会
- 近藤義郎(編) 1960 『月の輪古墳』月の輪古墳刊行会
- 滋賀県埋蔵文化財センター 2005 「荒神山古墳の発掘調査」『滋賀県埋文ニュース』第300号 滋賀県埋蔵文化財センター
- 島田貞彦 1925 「近江國坂田郡能登瀬の古墳」『歴史と地理』第15巻第3号 史學地理學同友會 64－82頁
- 高橋克壽 1995 「湖北の後期前方後円墳の動態」『琵琶湖周辺の6世紀を探る』平成6年度科学研究費補助金一般研究B調査研究成果報告書 京都大学文学部考古学研究室 109－121頁
- 田中勝弘 1982 「湖北地方の前方後円墳」『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書』Ⅶ 高月町瓢塚古墳 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 10－33頁
- 田中勝弘 1987 「狐塚古墳群の問題」『一般国道8号(長浜バイパス)関連遺跡発掘調査報告』Ⅳ 西火打遺跡・狐塚遺跡 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 83－91頁
- 辻川哲朗 2003 a 「近江における古墳時代中・後期の円筒埴輪－長浜古墳群・息長古墳群を中心として－」『日継知らず可き王無し－継体大王の出現－』滋賀県立安土城考古博物館平成15年春季特別展図録 滋賀県立安土城考古博物館
- 辻川哲朗 2003 b 「近江地域の円筒埴輪編年」『埴輪論叢』第4号 埴輪検討会 61－108頁
- 辻川哲朗 2003 c 「長浜市垣籠古墳の再検討」『考古学に学ぶ(Ⅱ)』考古学研究室開設五十周年記念 同志社大学考古学シリーズⅧ 同志社大学考古学シリーズ刊行会 389－400頁
- 辻川哲朗 2003 d 「長浜古墳群の埴輪」『北近江』創刊号 北近江古代史研究会 59－71頁
- 仲川 靖 1989 『柿田遺跡発掘調査報告書－県道中山東上坂線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
- 鍋田勇・大崎康文・高野陽子・石崎善久 1989 「私市円山古墳」『京都府遺跡調査概報』第36冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 3－79頁
- 西原雄大 2005 「大戊亥・鴨田遺跡の研究」『北近江』第2号 北近江古代史研究会 1－23頁
- 浜崎悟司 1988 「長浜市森前遺跡・国友遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』XV－1 長浜市森前遺跡・国友遺跡・小沢城跡・坂田郡近江町正恩寺遺跡 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1－19頁
- 福永伸哉 1996 「雪野山古墳と近江の前期古墳」『雪野山古墳の研究』雪野山古墳発掘調査団 293－308頁
- 細川修平 1998 「古墳時代における琵琶湖およびその周辺地域」『紀要』第11号 財団法人滋賀県文化財保護協会 55－94頁
- 丸山雄二 1995 『大塚遺跡』長浜市埋蔵文化財調査資料第12集 長浜市教育委員会
- 丸山竜平 2004 『巨大古墳と古代国家』吉川弘文館
- 宮崎幹也 1990 『法勝寺遺跡』近江町文化財調査報告書第6集 近江町教育委員会
- 宮崎幹也 1991 a 『埋塚遺跡2』近江町文化財調査報告書第9集 近江町教育委員会
- 宮崎幹也 1991 b 『塚の越古墳』近江町文化財調査報告書第10集 近江町教育委員会
- 宮崎幹也 1993 『西門寺遺跡』近江町文化財調査報告書第16集 近江町教育委員会
- 宮崎幹也 1994 a 『黒田遺跡3』近江町文化財調査報告書第17集 近江町教育委員会

Ⅵ 総括

宮崎幹也 1994 b 「北近江の土器様相」『庄内式土器研究』Ⅵ ー庄内式併行期の土器生産とその動きー近江系土器の実態とその移動 庄内式土器研究会 45ー66頁

宮成良佐(編) 1988 『越前塚遺跡発掘調査報告書ー加納工業団地造成関連ー』長浜市教育委員会

宮成良佐・森口訓男 1996 「豪族と古墳」『長浜市史』第1巻湖北の古代 長浜市史編さん委員会 170ー224頁

森下章司・藤本史子 2002 「滋賀県坂田郡近江町人塚山の発掘調査」『大手前大学史学研究所紀要』第1号 大手前大学史学研究所 15ー25頁

用田政晴・細川修平 1992 「近江」『前方後円墳集成』近畿編 山川出版社 35ー43頁

吉田秀則・田中勝弘 1987 『一般国道8号(長浜バイパス)関連遺跡発掘調査報告書』Ⅳ ー狐塚遺跡ー 滋賀県教育委員会文化財保護課・財団法人滋賀県文化財保護協会

吉田秀則 1988 『一般国道8号(長浜バイパス)関連遺跡発掘調査報告書』Ⅴ ー狐塚遺跡・法勝寺遺跡ー 滋賀県教育委員会文化財保護課・財団法人滋賀県文化財保護協会

挿図出典

図50 福井亘作成

図51 福井亘作成